◉細川俊夫（1955～）

『フルス（河）』～私はあなたに流れ込む河になる～

弦楽四重奏とオーケストラのための（2014）

東洋の道教（タオイズム）の考え方では、世界の根底には、気（宇宙の根源を生み出すエネルギー）が流れており、その流れの変化が天地宇宙を形作ると捉えられている。その流れは重なり合って「陰陽」をなし、その陰陽の二つの気が交わって万物を生じさせる。光と影、寒と暖、高と低、天と地、男と女のような相反する原理が、お互いを殺し合うことなく補い合い、宇宙をうみだしていく。（そこには男女の交合のようなエクスタシーがある）

私は音楽を、世界の奥に流れる気の河（音の河）と捉え、それを陰陽の原理によって生成させたい。西洋音楽の音を素材として構築するという考え方ではなくて、世界の奥に流れている気の流れを聴きだし、それを陰陽の宇宙観によって紡ぎだす作業が作曲という行為である。

一つの音（es音）の世界を聴きだすことから始まったこの『フルス』は、その一音に含まれる光と影を少しずつ拡大していく。そのes音が、esとdの二つの音に分離し、さらにそれがより大きな音程の差をもつ音響に展開していくが、根本的にはそれは冒頭のes音に孕まれていた音響と捉えている。

弦楽四重奏が人、そしてオーケストラはその人の内と外に拡がる自然、宇宙と捉えられている。弦楽四重奏のうちに孕まれた陰陽世界が、オーケストラにも反映され、その様々な流れの出会い、衝突、交合が河の流れのように変容していく。

副題の「私はあなたに流れ込む河になる」は、私の存在が音となり、より大きなものに向かって流れ込む様を想像して、この作曲を始めたことによる。アルディッティ・カルテットという特別に力強い「気」を感じさせる演奏家たちに触発され、彼らの40周年のお祝いとして作曲し、この作品を彼らに捧げる。この作品の前に彼らのために書いた弦楽四重奏のための小品『遠い小さな河』がこの作品の原型となっている。

［細川俊夫］

String Quartet－2 Fl（Picc / A-Fl）/ 2 Ob（E-Hrn）/ 2 Cl（Bs-Cl）/ 2 Fg － 2 Hrn / 2 Trp / Trb － 2 Perc（Ⅰ=Tam-Tam / Bass Drum / Snare Drum　Ⅱ=4 Japanese Windglockens / 3 Tri / Tam-Tam / 4 Bongos）－ Strings

初演　2014年10月24日　ケルン・フィルハーモニー
　　アルディッティ弦楽四重奏団、ペーター・ルンデル（指揮）、ケルンWDR交響楽団
委嘱　WDR、カーサ・ダ・ムジカ・ポルト、ユーラシア国際音楽祭

◉ヤニス・クセナキス（1922～2001）

『トゥオラケムス』

90人の奏者のための（1990）

1990年10月9日にサントリーホールで開かれた、武満徹の60歳を祝うコンサートのために書かれた小品。クセナキスは、当時日本と最も親交の深かった欧州出身の作曲家のひとりであり、武満とは1961年の初来日の際に知り合って以来、長く尊敬し合う友人であった。タイトル「Tuorakemsu」はToru Takemitsuの文字をギリシャ語風にしたアナグラムである。

精巧に作られたクセナキス特有の複雑な音響テクスチュアと「日本風」を意識したと思われる旋法的書法が交差し、3分あまりの作品でありながら、その内容の充実ぶりは他の後期クセナキス作品に引けを取らない。『トゥオラケムス』を形成するのは、連続する3つの異なる音響タイプである。金管楽器のきらびやかな*fff*のファンファーレで始まる冒頭部では、音色の異なる楽器群が強烈なクラスター音型を奏し、質量感のある分厚い音響空間を作り出す。ここで示されるのは、個々のピッチや音程関係ではなく、集合体としての高密度な音響であり、またそれらのリズミカルな跳躍運動である。中間部では、冒頭部とは対照的に、6音旋法から成るシンプルな旋律線が強調される。そこへ間欠的に被せられる弦楽器群の金属的な高音グリッサンドは、クセナキス作品で頻繁に用いられる特徴的な音色書法である。曲の終結部へと向かう3つ目の音響タイプでは、幾層にも重ねられた各楽器の非同期リズムが複雑な音のうねりを作り出す。高密度かつ混沌としたテクスチュアとして知覚されるこれらの書法は、クセナキスが「ふるいの理論」と呼ぶ一貫した音高システムの上に成り立つが、ポリリズム、ポリメトリック（多拍子）がもたらす複雑さゆえに、総体としてのテクスチュアに規則性が見出されることはなく、音響のざらつきとその微妙な変化が我々の耳を捉える。

4 Fl / 4 Ob（E-Hrn）/ 4 Cl / 4 Fg（C-Fg）－ 4 Hrn / 4 Trp / 4 Trb / Tub － Hrp － Strings（16-14-12-10-8）

初演　1990年10月9日　サントリーホール 大ホール「武満徹60thバースディセレブレーション」
　　岩城宏之（指揮）、新星日本交響楽団

◉ヤニス・クセナキス

『ドクス・オーク』

ヴァイオリン独奏と89人の奏者のための (1991)

現代音楽の牽引役として数々の20世紀、21世紀器楽作品の初演に携わってきたヴァイオリニストおよびアルディッティ弦楽四重奏団の創設者アーヴィン・アルディッティは、クセナキスの音楽の真の理解者であり、また作曲家自身が厚く信頼を寄せる演奏家のひとりであった。本作品は、アルディッティに献呈、初演された、クセナキスの数少ないコンチェルト形式の作品のひとつである。

独奏パートはヴァイオリン現代超絶技巧奏法のオンパレードと言えよう。曲全体を通してヴィブラートの使用が固く禁じられている一方、軽やかなリズムで刻まれる微分音奏法、緩急様々な速度で奏される単音および重音(ダブルストップ)グリッサンド、またそれらの混合形など、音高、強弱、音色、リズムにおける微細なコントロールを要する奏法が独奏パートの大部分を占める。総じて音の水平性、連続性が強調されるこれらの独奏パートと補完関係にあるのが、オーケストラ・パートである。ヴァイオリン独奏とホルン独奏が交差しながら明確な旋律線を作り出す中間部を除いて、オーケストラは一貫して分厚く複雑なテクスチュアを形成し、音の垂直性、空間性を強調する。ある時は各楽器群の音色の違いを強調しながら徐々に肥大化する音響体として、ある時は混沌としたノイズ音として、またある時は同一リズムで進行するクラスター音型として、変幻自在に形を変えながら独奏パートと対立、そして対話する。独奏ヴァイオリンとオーケストラの絶妙な掛け合い、また綿密に練られたオーケストラの音響設計により、様々な音色の層は互いを打ち消し合うことなく共存する。そこでは、音の建築家クセナキスならではの、高密度かつ変化に富んだテクスチュアの違いを聴き取ることができる。

Vn Solo－4 Fl / 4 Ob / 4 Cl / 4 Fg－4 Hrn / 4 Trp / 4 Trb / Tub－Strings (16-14-12-10-8)

初演　1991年10月6日　ストラスブール、フェスティバル・ムジカ
　　アーヴィン・アルディッティ(ヴァイオリン)、アルトゥーロ・タマヨ(指揮)、BBC交響楽団
献呈　アーヴィン・アルディッティ、ジャン=ドミニク・マルコ

◉フィリップ・マヌリ (1952～)

『メランコリア・フィグーレン』

弦楽四重奏とオーケストラのための (2013)

本作品は、マヌリの三作目の弦楽四重奏曲『メランコリア:デューラーによせて』(2012)を土台としている。ドイツ・ルネサンスの画家アルブレヒト・デューラーによる銅版画『メランコリア(憂鬱)』(1514)に着想を得たマヌリは、そこで描かれる四次魔法陣から派生した様々な数の組み合わせを用いてピッチやリズムなどの作品の基本構造を決定し、高度に抽象化されたやり方でデューラーの数学的概念を弦楽四重奏版『メランコリア』のうちに織り込んだ。静的な持続音、トレモロ、金属的な高音スル・ポンティチェロ(駒の近くで弦を擦る奏法)、急激な強弱変化、繰り返されるリズム型や旋律型などによって特徴づけられる弦楽四重奏版『メランコリア』の形式構成要素は、当作品において細分化、置換、変容、増補拡大されつつ「フィグーレン(形態)」となって再現される。『メランコリア・フィグーレン』は、先行する、あるいは既存の音素材を徹底的に再利用するという、ある意味では古典的と言えるマヌリの作曲書法の賜物である。

作品は7つの独立したセクション(I-Ⅶ)から成る。『メランコリア』の原曲スコアにほぼ忠実なオーケストレーションが認められるセクション、素材の大規模な拡張が施されているセクション、新たに書き加えられたセクション(例えば、弦楽四重奏版には存在しない、演奏者に一定の裁量を与えるアレアトリックな奏法が導入されているⅡ)まで、『メランコリア・フィグーレン』とその原曲の関係性は様々である。しかし、原則として弦楽四重奏が原曲スコアをなぞりつつ牽引役を担う点、そこで輪郭付けられた音響的、時間的特性がオーケストラの色鮮やかな音色増幅によって強調されている点は、全てのセクションにおいて共通する。

String Quartet－3 Fl(2 Picc) / 3 Ob(E-Hrn) / 3 Cl(Bs-Cl) / 3 Fg(2 C-Fg)－4 Hrn / 3 Trp / 3 Trb / Tub－3 Perc
(Ⅰ=Sleigh Bells / 2 Maracas / Mar / 2 Wood Blocks / Xyl　Ⅱ=2 Bongos / Claves / 5 Cowbells / Crotales / Suspended Cym / 3 Anvils / Glock / Tam-Tam / 3 Tom-Toms　Ⅲ=Hand Cym / Gong / Bass Drum / Mokubio / Tri / Vib)－Hrp－Pf(Cel)－Strings

初演　2013年5月4日　コトブス・フェスティバル(ドイツ)
　　アルディッティ弦楽四重奏団、エヴァン・クリスト(指揮)
　　コトブス州立劇場フィルハーモニー管弦楽団
委嘱　エヴァン・クリスト(コトブス・フェスティバルのために)